

北 どころ

第88号 2023年7月1日（毎月1日発行）

芸備線ストロール⑱ 新見駅

「歴史と文化の城下町 町歩きガイドを満喫」

梅雨入りして今朝は曇天。ネットの天気予報は午後から雨が迷ったが、来週雨が降らないという保証はないので、取材に出かけることにした。6月12日月曜日、朝7時半過ぎに車で家を出た。西城川の沿道を走るのだが、梅雨で水量が増えている。

備中神代駅からの県道8号線が山中の峠道で、舗装してあるが道

幅が狭く、軽ワゴンの運転でも緊張がある。分岐点を西川（にしがわ）の方に下ると、コンクリートの平橋（布原橋）に三脚を立てているカメラマンがいる。トンネルを出て鉄橋を渡る列車を狙っているのだから。

先月は間に合わなかった9時24分発（土日運休）の列車に、

無事乗ることができた。車内には旅装の先客が5、6人。平日の梅雨時なので、コロナ禍の終焉を意識した。

5分ほどで新見駅に到着。川のほとりの秘境駅から、中国地方中央部の主要駅である新見駅まで、わずかな時間で移動できるのがおもしろい。前回でも書いたが、芸備線の下町でも書いたが、芸備線の下町で、東城は有栖川（東城川）、新見市は高梁川が町中を流れている。新見市指定重要文化財である「御神幸武器行列」は、東城の「お通り」と呼ばれる神輿渡御行列を彷彿させる。新見藩による、船川八幡宮大祭（10月15日開催）での御神幸の警備が始まりで、長刀・鉄砲・弓矢などの武器を携えた者が総勢64名。駅前にはそれぞれの武者の姿を刻んだレリーフのモニュメントが建てられている。

新見駅は昭和3年（1928年）、伯備線の全通に伴い開設された。増改築はされたようだが、レトロな木造駅舎は当時の面影を残している。ホーム上屋には古いレールが使われていて、今でも見ることができる。

新見市の町並みは、東城町と雰囲気似ている。共に城下町で、東城は有栖川（東城川）、新見市は高梁川が町中を流れている。新見市指定重要文化財である「御神幸武器行列」は、東城の「お通り」と呼ばれる神輿渡御行列を彷彿させる。新見藩による、船川八幡宮大祭（10月15日開催）での御神幸の警備が始まりで、長刀・鉄砲・弓矢などの武器を携えた者が総勢64名。駅前にはそれぞれの武者の姿を刻んだレリーフのモニュメントが建てられている。

駅前を通りを直進して、川沿いの道を右に歩くとアーチ形の江道橋があって、渡ると城山（じょうやま）公園の登り口に出る。300本の桜を誇る花見の名所だが、今は深緑に覆われている。てっきり城跡だと思っていたが、あとで調べると新見藩の陣屋があった場所だという。新見藩ができたのは元禄10年（16



城山公園にある田山花袋「蒲団」の碑

97年)で、新しい城は造れない時代になっていった。

頂上近くの高台に、田山花袋の「蒲団」の碑がある。自然主義文学の金字塔と言われる「蒲団」は、阿哲郡新見町(現新見市)出身の横山芳子というヒロインが登場する。芳子には実在のモデルがいて、広島県甲奴郡上下町(現府中市上下町)出身の女流文学者、岡田美知代。岡田美知代は晩年をわたしの故郷である庄原市で過ごしている。そのつながりが、嬉しかった。

城山公園の東南に、御殿(ごてん)町の歴史ある町並みが広がっている。藩の官邸である陣屋を御殿と言ったので、御殿町と呼ばれるようになった。



た。「御殿町まち歩き」のパンフレットを手に町中を散策していると、無料休憩所の貼り紙に誘われて中に入った。太池邸、明治末期の建物で、新見初の百貨店として呉服をはじめ色々な商品を扱っていた。現在は新見市が借り受け、交流拠点施設として利用されている。

モニターに新見市の歴史紹介の番組が映し出されて、3人の聴衆を前にしてガイド役の人が解説している。「新見御殿町・町あるきガイドの会」の竹井慎さんで、3人の聴衆は市の商工観光課の職員の方々、どうやら研修中のようなのである。声をかけてもらったので、ミニコミ誌の取材で来ていることを説明すると、午後から

の「町あるきガイド」に参加させてもらえることになった。

昼食後の午後1時に太池邸に再集合、竹井さんに引率されて町内を歩いた。竹井さんはカナダのバンクーバー在住のエンジニア。故郷の歴史を学ぶことで愛着が強まり、帰国したときにボランティアでガイド役を務めているという。コロナ禍で3年のブランクがあったというが、解説はわかりやすく流暢だ。

「三日市船着き場跡」、新見の大動脈として、高梁川には高瀬舟も往来していたという。三日に市が立ったから三日市、庄原にも同じ理由で三日市がある。日射しが強くなり、晴れの国を実感した。

誠館の督学(校長)であった丸川松隠の高弟である。

路地の「三味線横丁」(写真下)にある「元料亭松葉」、ガイド役が津国屋現当主夫人の大西映子さんにバトンタッチ。天井からはみ出した鉄鍋のようなでっぴりが二階の掘り炬燵であることや、お酒を爛にする携帯道具等々、女性らしい生活面からの解説が新鮮だった。

いつの間にか、2時間半の時間が過ぎていた。茶菓をいただいた、地元の方も交えて談笑、楽しい時間だった。県境を超えて、終着の地まで辿り着いたことへのご褒美のような気がした。

山中の県道8号線を布原駅を目指して歩いた。ガイドの竹井さんの話では、以前はこの狭い山道をバスが走っていたそうで、当時はガイドレールも無く、布原―備中神代間では転落したバスの残骸が崖下に見えていたという。

入り口の道を間違えて1時間余りロス。布原駅に到着したときは、ホームの明かりが点灯して幻想的だった。心配した雨は最後まで降らなかったが、雨宿りする場所もない雨中の秘境駅を体験できなかったのは、少し残念な気もする。

津国屋の蔵の中。ガイドさん同伴で、事前に許可を得なくては見学できない。津国屋は藩指定の六間屋の一つで、札座、鉄間屋、造り酒屋、町名主をしていたという。津国屋の抱き茗荷(みょうが)の家紋の入った青備前の角德利、ギヤマンガラスの皿や什器、屋根から降ろして展示してある鬼瓦(写真上)は大迫力で、桃太郎の鬼退治を連想した。

交流のあった山田方谷の手紙や書も掲示されている。山田方谷は備中松山藩の藩政改革を断行した漢学者で、教育者としても多くの人材を育成したことで知られている。新見藩校・思

※「新見御殿町・町あるきガイドの会」についての問合せは、新見市観光協会(電話0867・88・8154)まで。



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「猫の縁談」

出久根達郎 著 中央公論社

帯の「猫と古本と古本屋の主人の物語」に、これは、読むしかない！ 作者は中学卒の集団就職で上京、月島の古書店で働いた。後年、独立して古書店を営みながら作家デビュー、「佃島ふたり書房」で直木賞を受賞。

表題作の「猫の縁談」は、稀覯本を餌に猫の貰い手を探す老人のことが描かれている。その猫じいさん曰く、「本を労る人間は動物を



粗略にすまい」。しかし、本に執着する人間は猫にも執着するようで、古書店主の仲介で手渡した猫を取り戻そうとする。人間の業を描いているが、それにしても、古本と猫の相性はぴったりだ。犬ではこうはいかない。他にも古本屋を舞台にした4作品を集録。

「南の島に雪が降る」

加藤大介 著 ちくま文庫

加藤大介という役者をご存じだろうか。「七人の侍」の七郎次役、と書けば顔く人もいると思う。昭和18年に招集され、ニューギニア戦線に投入される。ジャングルの中で過酷な自給生活を強いられる兵士たちを鼓舞するために、演芸分隊が組織された。責任者は元俳優の加藤軍曹、選考会が開かれ、役者以外にも絵描きや鬘屋等々、特技を持った者達が集結、かくして「モノクワリ歌舞伎座」が誕生した。



死の淵をさ迷う兵士たちにとって、演劇は魂の救いだった。東北出身の兵士は、舞台上で降らせた紙の雪を撫でながら死んで行ったという。加藤自身が主演で映画化、渥美清や伴淳三郎等の名優が集結している。

「楽園のキャンバス」

原田マハ 著 新潮文庫

現代絵画の巨匠アンリ・ルソーの作品を巡るミステリー。ニューヨーク近代美術館のキュレーター（専門職員）、ティム・ブラウンは、絵画の伝説的蒐集家の招待でスイスを訪問、かのルソーの名作「夢」に酷似した作品の真贋判定を依頼される。もう一人は日本人の新進気鋭の美術研究者、早川織絵。二人のうち、より正確な真贋判定を下した者にその絵を委ねるという。



手がかりとなるのは、ルソーの晩年を描いた謎の古書。当時はまだ若き天才、ピカソとの交流が描かれている。キュレーターだった作者の経験が生かされた力作。素人画家と馬鹿にされ、貧困の中で亡くなったルソーの生涯も興味深い。

「ぐんぐん伸びよう会」

(教室：庄原市川西町241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

当教室での教育の目的は、**自分で学んでいける人間に！！**

当教室では、個人別学習法で学年の枠がありません。一人ひとりの学力、気力、作業力の「ちょうど」を見ながら学習してもらいます。一斉の授業形態とは異なり、一人ずつの生徒の持っている可能性にチャレンジしていくことが、指導者としての私の役割です。

無料体験学習受付中！！ お気軽に問い合わせてくださいね。

対象者：0歳～小学6年生



文学探訪

庄原と「百三の青春」⑥

旧制三次中学の友・他——情熱のぶつけ合い

音谷健郎

大正期の学生にとって、阿部次郎『三太郎日記』、西田幾多郎『善の研究』に倉田百三の『愛と認識との出発』を加えた三冊は、必読の書でした。明治に入って西欧の思想がどっと入ってくるなか、それに匹敵する日本人による思想、哲学書を手にしたとの思いではなかったかと、想像します。

この『愛と認識との出発』の冒頭は「憧憬——三之助の手紙」で始まりました。三之助とは、旧制三次中学以来の親友で、3年先輩の歌人村憲吉の実弟です。三之助は百三の思想形成に一役果たしており、詳細はこのシリーズ②(2月1日号) 83号)に書きました。確認しておく、「わが友よ、わが心は常に哲学を思い、

御身を慕えり。われらの間の友情は熱愛せる男女の恋にも勝りて纏綿(てんめん)として離れがたく、純乎として清きよ」という親密さでした。これに対して、晩年に出した『青春の息の痕(あと)』は一高の級友の久保正夫、久保謙(両「久保」は別人)に宛てた手紙の形を取っています。これは百三が一高を退学した大正3(1914)年から『出家とその弟子』を出版するまでの5年間、2人に出した手紙約60通を収録したものです。折々の思索や恋愛、生活のことが驚くほど率直に記されています。百三の思想形成の背景を読み取ることが出来ます。

ど、敬虔な宗教的な家風があったことと関係があると思います。さて、文中の手紙の内容は、多方面に渡っており、要約は難しいのですが、この『青春の——』の書を出す動機を述べた次の言葉は、全体の調子を言いあてています。「一個の神に造られたる人間がいか



友人小田稔が住んでいた、どっしりとした生家(西城町十日市)。後にスーパー等になったが閉店中



2人で寄りかかって議論した開明橋(同)

この本を出すにあたっての「自序」には、「濡れ、輝き、愛と感傷とに至純であるところの、相触るるすべてのものに『よき意志』を用意してあるところの、神学的人間を讀者は感じ取って貰ひたいのである」とあります。「神学的人間」という宗教的態度が、底流にあることが同時にうかがえます。

百三にとって、三次の宗藤家と庄原の倉田家は共に浄土真宗の檀徒代表を務めるな



「三之助」らの生家（三次市布野町）。今は「中村憲吉記念文学館」となっています



憲吉の学校のそばの歌碑（同）。「満月は暮るく空より須臾（しゅゆ）に出でて 向ひの山を照りて明るし」の短歌

駅馬車に乗って庄原までの2時間余、「私たちは感傷的にならずにはゐられませんでした」「お互ひの言葉を吸い込むように、よろこび味はいながら、語り続けて、火のともる頃に私の家の前につききました」とあります。

久保正夫は、倉田家に20日間余り滞在し、上野池はもちろん、町の教会や山のなかの牧場（七塚牧場のこと）、国兼池を巡ったようです。庄原で来訪者を案内する先は、昔も今も余り変わらないようです。今は、丘陵公園が加わったかな。

この作品は、百三がいろいろと揺れ動く気持を吐露しているのも特徴です。大正6（1917）年には、正夫あてに次の手紙を書いています。帰省して家の逼迫を知っていますが、自分の非力を嘆くのです。

「私はどうしてお金を得たらいいのでせうか。教師をするには学歴がなく、翻訳をするには語学の力無く、創作をして原稿料を得るには名がなく、また勢力もありません。私は一ヶ月に原稿用紙に五百枚より多くはどれほど努力しても書けさうにありません」と。

百三といえば、前へ、前へと突き進む姿を想像しがちですがこの書は、逡巡したり、反省したり、弱音を吐く姿も、たつぷり見せてくれるのも特徴です。

さて、百三は、この他にも西城町に、三次中学時代以来の友人の小田稔がいます。平成27（2015）年、西城の郷土史家の故堤富士雄家等から倉田百三文学館に寄贈された百三から小田稔宛ての手紙12通が残っています。手紙をひもといてみます。「開明橋の上に、お別れのハンカチーフを振ってから、もう三日に成

ります。……欄干に倚（よ）って、親しい友の稔さんと語る、こんな楽しみが何んで他に御座いませふか」「蒼き山、涼しき社、麗はしい一幅の自然画を前にして、清き西城の細韻（せせらぎ）の意味ある響きを夢と聞きつつ、稔さんと語る、こんな楽しみが果して他にあり得やふか？」（旧制中学3年次）

「君の秘密は僕の胸に、僕の秘密は君の胸に、互いにうち明けて、末永く真友であらねばならぬ」（同）

「僕が交はり甲斐があると思つて居る友人が二人ある、君と○○○（実名）と中村三之助君である」（5年卒業時）。三之助とは、『愛と認識との出発』の巻頭を飾つたあの三之助です。

百三は普段は無口で、取っ付きの悪い外面（そとづら）ですが、いったん口を開くと、気さくで饒舌だったとは、妹艶子の証言です。

百三については、「文豪」の名の下にいくつかの虚像が一人歩きしているように思えます。素顔の百三は、少し違うのではないのでしょうか。郷里庄原での百三像に、もっと近づきたい、と思います。

次回は「お絹さんを巡る懊悩（おのう）」を取り上げます。

「植物画とは何か
—日本の植物図譜を中心に—」(19)

「日本のシダ植物図鑑」は、石川浩、金田善一、工藤芳子、小幡秀子、小林繁、小牧於、伊達健夫、中池敏之、中村武久、羽田ハル、福島克子、古屋一穂、別府穰、柳原真理子、山本明、和久時昭(五十音順)が描いたシダ植物の全形図(部分図をふくむ)が右、左にシダ標本の写真を掲載し、見開きとなっている。線画で描かれた植物図は中心に全形図を置き、余白に孢子囊をつけた葉片や孢子などの部分図がバランスよく配置されている。

多くの画家の中でも最も多くの図を描いたのは工藤芳子である。そして、編著者の中池敏之が描いた図も、中池を除く15名の画家の図も、優劣つけ難い優れた植物画である。写真技術が飛躍的に進歩している現代、線画による植物図鑑、また、カラー写真と線画で構成された図鑑があるということは、図鑑利用者へ多様な植物の姿を教えてくれ、実に楽しいことである。

1972年には前川文夫の大著「原色日本のラン—日本ラン科植物図譜」が出版された。この「原色日本のラン—日本ラン科植物図譜」は日本産ラン科植物全種70属136種(変種をふくむ)と若干の雑種と園芸品種を網羅して著された大著で、その中にはシナシュンランなどの外来種もふくまれている。すべてのランは太田洋愛が描き、187図版に収められている。そして、表紙は羊皮革装の豪華本でもある。

太田洋愛が描いたランの図は、1種ごとに1図版に収め、全形はツチアケビのような大型のランは分割し、タカネトンボのように小型のランは同じ大きさに描いてる。また、シナシュンランの場合は172図版にシナシュンランの全形図とシナシュンランの標準的な花の部分図が収められている。そして、173図版にはシナシュンランの園芸種、朱舜水・大富貴などの花の部分図が収められている。同じように167図版はカンランの花の諸形が、170図版はシュンランの園芸種の花の部分図が、そして、177図版には1940年、池田成功が栽培の金稜辺(*Cymbidium pumilum* Rolfe)に大型のシンビジュウの品種(種名不明)を交配して生れた大磯の中から生じた磯千鳥と群千鳥という2品種の花の部分図が収められている。

「原色日本のラン—日本ラン科植物図譜」に収められている186図版は、太田洋愛が描いた彩色された美しい図で、生品のランを正確に写生した上、透明水彩絵具で丹念に着色されており、多くの人びとから愛されているランの気品が巧みに描かれた名作といえる。

太田洋愛が桜の絵を最初に書いたのは1965(昭和40)年、平凡社の世界大百科事典の「サクラ」の項の図版作成を依頼され、大井次三郎を国立科学博物館へ訪ね、寒桜を描いたのが最初だという。それ以後、各地の桜を



求めて8年間、「1万7千キロに及ぶ桜行脚の中で描きためた絵は238枚となった。(中略)この標本と私の絵と、文献をにらみ合せて、171点を選び出し、154図版にまとめていただいた(後略)」とあるように1973(昭和48)年に文・大井次三郎、画・太田洋愛「日本桜集」が出版された。

この「日本桜集」には、ヤマザクラやカミズクラなどの日本に自生する野生の桜から栽培種カンヒザクラ、紫桜など140品種の桜が153図版に収められ、右に太田洋愛の彩色され

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

た美しいヤマザクラなどの花をつけた枝の全形図が掲載され、左に大井次三郎の解説と太田洋愛が描いた花の部分図、葉辺の鋸歯の部分図(いずれも線画)などがある見開きとなっている。太田洋愛が描いた図は、「紫桜」(図1)のようにその特徴が一見してわかるように構図に気を配り、精緻に描いている。日本人が最も好む桜の姿がみごとに描かれている。



図1 太田洋愛が描いた「紫桜」
(大井次三郎「日本桜集」による)



図1と同じく太田洋愛が描いた「鶯(ひよどり)桜」
(「日本桜集」による)

「つれづれ歌談」③7

松岡初枝

ビバルディ作曲の「四季」、春を迎える歓びの軽やかなメロディから始まりですが、一転、夏の風の激しさが空気を震わせる曲調となります。洋の東西を問わず、お天気だけは思うようにならないものです。

・夏麻(なつそ) 引く海上瀉の沖つ渚(す)に船は留めむさ夜更けにけり 東歌(下総の国人)

海上瀉の沖の州に、今日は船を留めよう。もう夜も更けて来たから。上総から来た船は下総の沖の州で船を留める。夜に天気が急変したら大変です。夏空は移り気ですから。

・苦しくも降り来る雨か神(みね)の崎狭野(さの)の渡りに家もあらなくに



長奥麻呂(ながのおきまろ)

急に降って来た雨、三輪の崎の佐野の渡しには、身を寄せる家もないというのに。旅の途上での急な雨は身も心も冷えてしまします。現在の和歌山と三重の境、新宮市あたりで詠まれた歌ですが、今でいえば出張先での天気の急変。雨が降っても我が家が近ければこんな思いはしないのにと奥麻呂は嘆いているのです。当時の旅は辛いものでした。

・我がやどのいささ群竹(むらだけ)吹く風の音もかそけきこの夕(ゆうべ)かも 大伴家持

私の家のささやかな竹林に吹く風の音が、かすかで心が落ちつく夕方だなあ。この頃の大伴氏の立場といえば、名門なるがゆえに政治の動きに翻弄されてゆく不安定な立場に立たされています。ましてや妻に先発たれた家持の心は風(藤原氏)の前の小竹のように揺らいで不安定です。天候の移ろい、世の移ろい、自分を含めた一門の没落を暗示させるような歌となっています。

今の世にも通じるざわざわとした不安の在り処は、歴史上で繰り返されて来たのです。

(なんだろう……)

奥の部屋の方から奇妙な音がする。

(誰かのクシャミ……)

おそるおそる襖の影から顔を覗かせたが、誰もいない。

(うん?)

今度はペタペタという音。誰か……、いや、何かが廊下を歩いていく。

(ああ……)

姿を現したのは座敷童、ではなく白い猫である。痩せていて、眼病を患っているのか右目がほとんど塞がっている。身体がふるふると揺れていて、脚元も心もとない。相当な老猫なのだろう。

「ハクシヨン! どこに隠れてたの?」

奈美さんが呼び掛けて、猫に歩み寄った。猫が「クシユンクシユン」をクシャミを連発して、思わず笑ってしまった。クシャミをするからハクシヨンか。そういえば、ハクシヨン大魔王というアニメ番組があったな。

「もう二十五歳なんですよ」

驚いた。去年の新聞で、二十七歳になる雌のサビ猫がギネス記録で世界最高齢と認定されたという記事を

読んだ。人間に換算すると百二十歳になるといふ。

ハクシヨンは、奈美さんに頭を撫でられて、倒れ込むようにペタンと廊下に横たわった。

「祖母も、まさか自分よりも長生きするとは思ってなかったでしょうね」

しみみりした口調になった。

「お茶を入れますから、一息入れてください」

んだ。

「あら、わたし、ハクに追い越されているわ」

それからは、ハクさんと呼ぶようになったという。生真面目な真理恵さんらしい話だ。しかし、「ハクさん」を「ハクシヨン」と聞き間違えるとは、わたしも毫碌したか。

真理恵さんは、わたしが営む古本屋の常連客だった。しばらく姿が見

引き取られた。

「ずっと両親は交通事故で亡くなったと教えられてたんですけどね。高校生の時に事件の真相を知りました。母親が保険金を得るために父を毒殺したんです」

犯行はすぐに露見して、母親は刑務所に収監された。

「自分の一人息子を殺した犯人の娘を引き取って育てたんですよ。復讐するためでしょうか?」

問いかけるように奈美さんがわたしの顔を見た。

「そして、わたしが成人したときに、母親が刑期を終えて出所して来た。祖母の元に、一冊の本が送られてきました。それがこの本です」

奈美さんが、目の前に本を差し出した。「女人・石の仏」、長谷川聰子の写真集だ。女性の面影を強く宿した石仏の写真を集めている。付箋の貼ってあるページを開くと、赤ん坊に乳を与える母親の姿が刻まれた石像の写真だった。赤子を見る母親の慈愛に満ちた表情が美しい。茨城県西茨木郡岩間町市野谷の観音堂にある子安観音。

記憶に残っている。この本もうちで買った本だ。この写真を見て、母親なんて虚しいですね、と真理恵さ

子安観音

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑧2

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

誘われて、リビングに行った。ハクシヨンは、そのまま廊下に蹲って、梅雨晴間の日射しを浴びて、気持ちよさそうに目を閉じた。庭の額紫陽花が、青い花を咲かせている。

ハクシヨンの名前がハクであることを教えてもらった。シロでは当たり前すぎるのでハク。祖母の真理恵さんは、何かの雑誌で、猫の年齢を人間の年齢に換算している記事を読

「実は……、わたしと祖母は血がつながっていませんでした」

奈美さんが話し始めた。母親の連れ子だったという。両親が亡くなって、父方の祖母である真理恵さんに



んは呟いた。こんなに愛情を注いでも、報われることはないんですから……。

「祖母が突然失踪して、わたしは真相を調べるために茨城の岩間の観音堂に向かいました」

ハクさんがクシユンとかわいらしいクシヤミをした。わたしはたまらず笑い出した。

「駄目ですか？ 最期は大どんでん返しがあつて、父親も本当は死んでなくて、この家でみんな幸せに暮らすんですが……」

苦笑を浮かべてかぶりを振った。棚にずらりと推理小説の本が並

でいた。見覚えのあるタイトルは、うちの店から買った本だ。英語の本もある。高校で英語を教えていたというから、日本では未翻訳のものを、原書で購入して読んでいたのだろう。真理恵さんは熱心な推理マニアで、自分でも書いてみたいと言っていた。

それにしても、自分の孫を主人公にして、家族を登場させてしまうと……。その扱いにも、鬱屈した想いや願望が込められている。

「君のご両親には、このノートのことは黙っていた方がいいだろうね」

奈美さんが頷いて、真理恵さんの創作ノートを閉じた。

「奈美ちゃん、いる？」
庭の方から声がした。

「隣の山田さんです。ハクさんの世話をしてもらっているんです」

おにぎりを連想させる坊主頭の中年男が姿を現わした。水木しげるの漫画に出てくるような風貌で、真理恵さんの小説の中にも登場してくるような気がした。

「その子猫、どうしたんですか？」
小さな子猫を肩に乗せている。ほとんどの白毛だが、顔のハチワレの額と尻尾にキジトラが入っている。

「餌やりしていた野良猫が4匹、生

んじやってね。他は貰い手があったんだけど、こいつだけ残っちゃってね。奈美ちゃん、飼わない？」

「だめだめ、うちはアパートでペットは禁止」

奈美さんは東京の大学に通っている。

「うちは犬がいるからね。仕方がないから、ここでハクと一緒に暮らしてもらうか」

肩から引きはがして、子猫をハクさんのそばに置いた。子猫は、悲鳴のような声を上げて啼いた。

寝ていたハクさんが、ムクリと身を起した。大きくノビをして、子猫の身体のおいを嗅ぎ始めた。お尻の辺りは、とくに入念に嗅いでいる。

そして、子猫の全身を舐め始めた。ペロンペロンペロンペロン、力強く舐めている。

「おつ、相性が良いみたいだな。ひよっとしてハクの孫？ いや、玄孫（やしやご）かな」

「いやまだまだ、ギネスブック級のばあちゃんですからね。来孫（らいそん）、昆孫（こんそん）、仍孫（じょうそん）、雲孫（うんそん）……」

子猫も、気持ちよさそうに目を閉じている。そのハクさんと子猫の姿

に、子安観音の石仏の姿が重なった。

まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
- ・地元の絵葉書、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

二月二日 浄瑠璃坂敵討 一六七二
(寛文十二)年

一六六八(寛文八)年二月、宇都宮藩主奥平忠昌が死んだ。葬儀の際、家老奥平隼人と同奥平内蔵介が斬りあいをし負傷の内蔵介は死亡した。隼人は切腹を拒否し、追放処分になった。内蔵介の子源八も改易になった。源八は隼人を親の仇として、伯父



の馬目外記ら脱藩した四人の親戚と討つ計画を立てた。隼人は江戸の旗本大久保家に隠れていることはわかっていた。その内に、奥平家は山形転封となり、隼人の弟主馬充も山形にいたので、一六七〇(寛文十)年に源八らは主馬充を討ち取り、首に果たし状をつけて大久保家に投げ込んだ。

隼人は浄瑠璃坂に転居した。一六七二(寛文十二)年二月二日夜、源八側数十人が隼人の寝込みを襲い、隼人の父など九人を討ったが隼人は斬れず、夜明けに引き返した。そこへ隼人が手勢を連れて追ってきたので牛込の土橋あたりで決闘となり、ついに隼人を討ち取った。

幕府は正当な仇討ちと判定したが、隼人の家のまわりに茅(ちがや)をつんで火をつけたのが罪となり、源八ほか九人が伊豆大島へ流罪となった。

また、赤穂浪士はこの仇討ちを研究したといわれている。

二月七日 一ノ谷合戦 一一八四
(元暦元)年

都落ちした平氏は、いったんは九州まで逃げのびたが、再び東上して一一八四(寿永三)年一月には、摂津福原に戻り、播磨との国境の一ノ谷に城郭を構えた。二月に入ってから勢いを増した。後白河法皇の平氏追討の宣旨を受けて、源範頼・義経は一ノ谷攻撃に向かった。

戦いは二月七日早朝より始まり、義経は鶴(ひよどり)越えの坂から安心していった平氏を奇襲、範頼も生田の森から激しい攻防戦を繰り返し、一ノ谷に追い詰め、四時間の激戦の末平家を海上に駆逐。掲載の浮世絵は「鶴越逆落とし」を描いた歌川広重の版画。

二月十二日 家康征夷大將軍 一六〇三(寛文三)年

徳川家康は、「徳川長期安定政権」をめざして模索を続ける。

朝廷は広橋兼勝らを武家伝奏に任命し、幕府との交渉を専任させることにした。そして、伏見在城の家康に征夷大將軍の位がくだった。幕府には奏者番の職が新設された。諸大名の將軍拝謁など一切を取り仕切る役。

二月十九日 屋島の戦 一一八五

(元暦二年)

一ノ谷で敗れた平家は四国讃岐の屋島に陣をとった。一一八五年二月十八日、義経は摂津国渡辺から、暴風の中をわずかに百五十騎を率いて海を渡り、阿波国椿浦へ上陸した。通常三日の行程を、暴風を利用してわずか四時間で渡った。上陸後は土地の武士を味方につけながら、十九日に屋島の平家を攻めた。平家は全軍船をそろえて長門国へ向かった。

二月二十九日 目黒行人坂の大火 一七七二(明和九)年

江戸三大大火の一つ、「明和の大火」のことである。三日間にわたって、再出火を繰り返し燃えた。地域は麻布、京橋、日本橋、江戸城下の武家屋敷、神田、千住方面、本郷、駒込、根岸、日本橋地区は壊滅した。

類焼した町は九三四、大名屋敷は一六九、橋は一七〇、寺は二八三を数えた。山王神社、神田明神、湯島天神、浅草本願寺、湯島聖堂も被災した。死者一万四七〇〇人、行方不明者四千人を越えた。

出火元は日黒の大円寺。原因は、武州熊谷無宿の真秀という坊主による放火である。同年六月二十一日に市中引き回しの上、小塚原で火刑に処せられた。

シニア海外ボランティア・エピソード⑦ 「ウォーキング・サファリ& ロッジ内を象が行進！」

山崎 允まこと

2003年6月23日から8日間かけて、ザンビア共和国東部に視察旅行に出かけた。サウスルアンガ国立公園は、ザンビアを代表する観光地ヴィクトリアフォールズに次ぐ観光地だ。アフリカ有数の動植物相を誇り、野生動物の保護に力を入れている。

国内には20の国立公園があるが、サウスルワンガ国立公園はルワンガ川に沿って9050キロ平方メートルに広がるザンビアで二番目に大きい国立公園（庄原市の面積の約7.2倍）。アフリカのウォーキング・サファリの発祥地でもあるため是非視察しておくべきと滞在日数を増やした。

生息している主な動物は、象、ライオン、キリン、カバ、シマウマ、バッファロー、アンテロープ（姿の優美なウシ科の哺乳類の総称でレイヨウともいう）、インパラ等約60種類、鳥類は400種類をこえる。美しい鳥たちを間近に見ることが出来、特に

象の生息数は他の国立公園に比べ、群を抜くと言われている。

ロッジの経営者たちはイギリス統治下から観光産業に従事していて、ザンビア政府に頼ることが少なく、宿泊客を集める手法を築き上げている。ロッジの建物と調度品のデザイン、奥行きを感じさせる色彩感覚の装飾品はヨーロッパ風のしっとりした雰囲気を出していた。

1912年（明治45年）、当地のザ



ンベジ川河口の町に生まれたノーマン・カーは、両親の母国であるイギリスで教育を受け、サウスルアンガに舞い戻った。当時、農民の生活を脅かしていた象のハンターをしていた青年だったが、やがて動物保護の第一人者になっていった。

彼の名前を一躍有名にしたのは1962年のドキュメンタリー映画『Return to the Wild』。本も出版され、2年後に『野生にかえれ』のタイトルで日本語にも翻訳された。母ライオンを射殺された2頭のライオンの子を飼育し、最後は野生に返す物語である（写真は当時のノーマン・カーと2頭のライオン）。ウォーキング・サファリの原点と言われている。

当地で実行されているウォーキング・サファリは、訓練されたライセンスガイドの指導で、動物たちとは数10メートルの間隔を保ち、動物たちを刺激しない着衣、言動を心掛ける。すると、ライオン達はまるで我々には興味がないように、無視して寝転がっていた。

大食漢の象の“落とし物”があちこちにある。直径20センチぐらいの糞が転がっていて、踏んづけたりする。そのにおいて

澄み切った空気のブレンドを嗅ぎながらの歩きは、貴重な体験ではないかと思った。

サウスルアンガでは世界的に有名な体験ツアーがある。主役は象たち。毎年10月から11月に野生のマンゴークが実り、マンゴークの醸し出すスイートな香りに誘われて10数頭の象が特定の木に向かって自分たちのコロニーから往復行軍する習性がある。

この習性にヒントを得て、白人のオーナーはその象の通路をまたいでロッジを建てた。象たちはロッジ内のフロントの前を行きと帰りに行進するのだ。この行進を見ようと、フロント周辺に設営された特別席に観光客が座り、主役の順番を今か今かと待っている。でも、マンゴークの熟し加減により、彼らの行進の実施日は前後される。必ずしもお客さんの滞在中に出会えるかどうかは限らない。

後年、東京の旅行エージェン트가2年間にわたり企画し、2回とも大成功！宝くじに当たるような感じのする旅行である。ちなみにロッジ内の「象の行進」がユーチューブで見られるので、興味のある方は「Elephants of Mfuwe Lodge」で検索を。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

梅雨晴を天から賜う誕生日

近藤 昌平

句碑の文字碑石古色梅雨深し

富久光

藤井棋士七冠成るや七変化

片岡 正人

日向水木陰に移すお昼時ひなた

隆愚

忘れたり思ひ出したり夕端居

大槇 三代子

瀬戸の島ほのかに香る花みかん

寺内 龍二

青山に分かれ道あり梅雨の月

赤川 冬人

紫陽花は毒持つ花と人は言ふ

松岡 初枝

逆さに吊りて魔除けにすると

投稿&寄稿

候のことば

隆愚

「七夕」

七夕は古くから行われている日本のお祭り行事で、一年間の五節句のひとつに数えられています。毎年七

月七日の夜に、願い事を書いた色とりどりの短冊や飾りを笹の葉につるし、星にお祈りをする習慣が今も残ります。
五節句は、人日（一月七日）、上巳（三月三日）、端午（五月五日）、七夕（七月七日）、重陽（九月九日）です。
乳をこぼした跡ともいわれる天の

川の、きめこまかな星の群れは、夜空にきれいにかかります。天の川をはさんで、こと座のベガが織り姫の星、わし座のアルタイルが彦星の星。雨で川を渡れない時は、鵜（かささぎ）に乗って、ふたりは会いにいきます。

別るるや夢一筋の天の川 夏目漱石

「草刈り」

赤川仁洋

またこの季節がやってきた。所有する空き地の草刈り。住宅地なので放置するわけにもいかない。

草刈り機の燃料タンクに、ガソリンとオイルの混合油を充填して、スロトルのワイヤーを引っ張る。久しぶりなので、エンジンがなかなか始動してくれない。このまま使えなければ……、不安を覚え始めた頃によくやくブルンブルンと動き始める。

スロトルを全開にして、けたたましいい音を響かせながら、先端の回転刃を左右に振って草を刈る。最初はぎこちなかった動作も、次第にコツを思い出して安定した。以前は叔父に頼っていた。自分で草刈りをするようになって、手本は叔父である。父方の農家を継いだ叔父の草刈

りは年季が入っていて、太い灌木でも心地よいほどにスパスパ切断。その叔父も高齢で、今は施設に入っている。

ノイバラの群生、鋭い棘があるので踏み込めずいたら、年々勢力範囲を増やしている。草でもなく、きれいな花をつけるのでまあいいか……、叔父ならば刈っただろうか。

今回、今月の3冊で紹介した「猫の縁談」を読んで少し落ち込んだ。作者には、古書店主としての長年の経験と本物の知識がある。わたしはまだまだ門前の小僧だ。草刈りも古本屋も半人前、でもそれが楽しいのである。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：8月19日(土) 9:30～11:30

テーマ：「竹チップを活用した地域のブランド米づくり」

講師：松田一馬氏（農事組合法人殿垣内代表理事）

場所：生活交流館（備後庄原駅隣接）

参加費：500円（学生200円、お茶菓子代込み）

申込み＆問合せ：080-3631-9125（柳井妙子）



九日市浴衣デー開催 7月9日(日)

当日、浴衣で来場した方には、キッチン北川のかき氷を
無料で差し上げます。

浴衣のレンタル（先着5名まで）もやっています。

レンタル料：500円

場所：楽笑座（9:00～12:00）

※地産地消、地域の特産品を九日市で販売してみませんか？
各自治振興区からの参加をお待ちしています（九日市愛好会）。

徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家（徳岡佛性坊）として多彩な
活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品
の展示販売を、どら書房の一角でしていま
す。

茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を
展示しています。あなたのお気に入りの逸
品が見つかるかもしれません。

※天井が低いので頭上注意！

どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売（値札のないものは百円均一）。
毎週水曜日の朝に入荷予定。

●黒ニンニク好評販売中！●

（青森産ニンニクホワイト六片使用）

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの
効果が期待できます。

（80g入り 500円）

※売り切れのときはご容赦ください。

編集後記

◇7月号をお届けしま
す。一年の折り返しま
すね。芸備線ストロー
ル、新見駅が実質上の
終着駅で、岡山の散策
（探索？）はこれで終
了です。次回からは備
後落合駅で木次線に
乗って、油木駅、三井野原
をレポートする予定です。

◇コロナ禍の影響も少なく
なって、季節の行事や地域の
活動も再開されています。コ
ロナ期間のダメージも大き
く、これからは大切になっ
てきます。
◇赤ヘル軍団、苦手な交流戦
もどうにか五分で乗り越えま
した。来年新サツカー場が
オープンするサンフレッチェ
もカープも、これからが大事。
「県北どらくろあ」も、これ
からが大切です（笑）。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第262回

くんちいち

しょうばら九日市

出店一覧 (順不同)

- ・文屋
- ・お福
- ・郷屋
- ・工房アム
- ・ぬくもり
- ・ちくちくはうす玉手箱
- ・クラフトショップ
- ・くららおばさん
- ・農楽会
- ・二八そば加工所
- ・17KITCHEN
- ・アーミッシュ
- ・ふくふく牧場
- ・満じいの手打ち蕎麦
- ・とらぢ
- ・健康企画グループ
- ・さだっさ
- ・里山キッチンほっぺ
- ・久代水産
- ・くんえん工房 香豚
- ・克国水産
- ・田崎屋
- ・佐藤園芸
- ・TSUDA
- ・てしごと比和
- ・土遊び布遊び



2023年
7月9日(日)
9:00~13:00

当日は**浴衣デー**、浴衣で来場の方はキッチン北川のかき氷が無料！
浴衣の着つけ (レンタル料 500 円、先着 5 名)
楽笑座 (9:00~12:00)

TOPICS

- ★地域家族まなび場・三軒茶屋オープンイベント
10~14時 餅まき、子供向けバンドライブ等
- ★市民ギャラリー「アート多愛夢」
7月7日(金)~9日(日) 10時~15時
森原多美子水彩画作品展
- ★どら書房→休憩所あります！！
- ★風龍→九日市スペシャルで餃子200円！
- ★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き
- ★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き
九日市特製ピタサンド600円



* 出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円~
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 (楽笑座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

